

公開講演会

古代エジプト人の神々

日 時:2007年3月17日(土) 14:00-16:00
会 場:同志社大学 今出川キャンパス 神学館礼拝堂
発 表:吹田 浩(関西大学文学部教授)
司 会:中田 孝(同志社大学大学院神学研究科教授)
主 催:一神教学際研究センター、日本オリエント学会

講演要旨

今回の講演会は日本オリエント学会との共催で行なわれた。発表者はまず、関西大学で行なわれている、資料収集と文献読解が中心となるエジプト研究の紹介を行なった。古代エジプトの歴史は紀元前三千年頃から始まり、独特な多神教の世界観を持っていた。それは一神教と必ずしも対立するわけではない、実に柔軟なエジプト人の信仰であったと発表者は述べる。

発表者によると、古代エジプト宗教の文献研究はその資料が断片的であり、暗示的であることから、多大な困難がつきまとう。資料には儀式や来世の一場面が描かれているものの、その宗教全体の体系は表されていない。例えば有名なラムセス1世の死についての描写を見てみても、せいぜいアヌビスやホルスといった神の名前がそこに記されている程度で、その前後の文脈を表してはいないのである。

しかしそれによって神々のリストアップを行なうことはできる。そしてその作業の中で、古代エジプトの神々が実に多様な名前と、我々の理解を超えるような姿を持っていることが分かる。例えば「ハラ」、「ハロ」、「ハル」という多くの呼称を持つホルスや、頭が昆虫であるケプリが挙げられる。そこからうかがえる古代エジプト人の神々の特徴は、それぞれの神が持つ表現方法の多様さ、その姿の無原則さである。

そしてそのことは逆に、そうした多くの神々は古代エジプト人にとって実のところ神ではなかったのではないか、という疑問を与えもする。そしてこの柔軟で多様な神々の表象が、エジプト的一神教への発展という視座への可能性と繋がっているのではないかと発表者は投げかける。例えば、宗教文書には先述したように神々の名前というものが明記されている。しかし時々、神々の固有名詞とともに一つの尊称が併記されている。例えば発表者が調査しているイドゥートの墓で見られる「大いなる神」という表現がまさにそうであるが、他の神々や王の名が明記されている以上、このような曖昧で不特定の表現で何者かを指そうとしていることには違和感がある。実証は難しいだろうが、これはその姿や名が隠されている一なる神、真の神を指しているのではないか、という。そうであるなら、このことから古代エジプト人が神々に特定の姿を与えることや、特定の表現や呼称で確定することを忌

避していたのではないか、神の表象の無原則さにはそのような背景があるのではないか、ということがうかがえる。

古代エジプトにおける多神教から一神教への変遷に関する研究動向としては、例えば古代エジプトの社会的危機への対応が、多神教から一神教への変遷を生み出したとする説が挙げられた。これは新王国時代の一神教である「アマルナ」におけるイクナトン王の中央集権体制の事例に当てはめて考えることができる。この場合、一神教というのは多神教と対立する体系ではなく、多神教的世界における、大きな社会的危機に対応する為の緊急措置としての機能なのである。

(CISMORリサーチアシスタント・同志社大学大学院神学研究科博士後期課程 高尾 賢一郎)

プログラム

1. 挨拶:前田 徹(日本オリエント学会理事、早稲田大学文学部教授)
2. 講演:吹田 浩「古代エジプト人の神々」
3. コメント:中田 孝(同志社大学大学院神学研究科教授)
4. 質疑応答
5. 挨拶:中田 孝

古代エジプト人の神々

関西大学文学部教授
吹田 浩



関西大学の吹田でございます。

本日はお足をお運びいただきまして、ありがとうございます。本日は「古代エジプト人の神々」というタイトルでお話をさせていただきます。

ここでは、しばしば見られます「古代エジプトの神々」というタイトルにはいたしませんでした。似てはいるのですけれども、「古代エジプト人の神々」。すなわち「人」という言葉を入れております。「古代エジプトの神々」と「古代エジプト人の神々」というタイトルで私が区別しようとしたしたのは、現代の研究者、あるいは広く現在のわれわれが素朴に考えている古代エジプトの神々についてではなくて、当時の古代エジプト人が見ていた神々についてお話をしたいと考えたからです。「古代エジプトの神々」と「古代エジプト人の神々」はこういう意味合いで分けております。

お話を始めます前に、少し関西大学のエジプト学についてお時間をいただいたほうがよいかもしれません。

関西大学には、私の前任者に加藤一朗という先生がおられました。現在もご健在でございます。アメリカのシカゴ大学でエジプト学を勉強されまして、関西大学に昭和31年、1956年に着任されております。私がそのあとを受けまして着任しましたのが平成4年、1992年になります。いまから15年前ということになります。現在は平成19年、2007年ですから、加藤先生が着任されてから50年を超える期間、実は関西大学でエジプト学の研究をしてきたわけです。

関西大学のエジプト学研究というのはたいへん

地味です。考古学ではなくて、文化史を中心にしておこなってきました。一般的に、考古学というのはたいへんインパクトがありまして、これはどの分野でもそうです。日本でもそうですし、インドでも中国でも、ヨーロッパでもそうなのですから、何かを見つけますと、たいへん大きな反響を得るわけです。ところが、関西大学では、もっと地味な文献中心、文献を読むという道を進んできました。

ただし、2003年から関西大学でも、エジプトで文化財の修復のための調査を始めております。これは発掘ではありません。発掘のようなことも一部いたしますけれども、あくまでも文化財の修復ということで2003年から始めております。今日も少しご紹介できるのではないかと考えております。

はじめに、関西大学のエジプト研究を簡単に紹介させていただきました。本日のお話に戻りたく思います。

古代エジプトは、紀元前3000年ごろから歴史が始まります。その後、ほぼ3千年の歴史があります。今日はエジプト人が考えていた神々について、その長い期間を念頭においてお話ししたいと思います。この長い期間に継続的にあてはまるエジプトの「神」の基本的な意味合いと、3千年の歴史のなかで、ちょっとキリスト教、ユダヤ教、イスラームとは違うのですが、ある意味の一神教へと変化していった姿をお話ししたく考えております。

言うまでもなく、古代エジプトはその歴史を通じて、初めから最後まで多神教の世界でした。多神教というのは、実はたいへん多様でありまして、古

代エジプトの多神教と日本の多神教、中国の多神教、インドの多神教、いずれも大きく異なった特色、あるいは個性というのを持っております。

今日は、エジプトの多神教の独特な世界の一部をご紹介できればと思っております。何とも不思議な、そして柔軟な神々、そして世界観を見ることが出来ます。

また、ここでは一神教という言葉も使いますけれども、この言葉は一般に信じられているような多神教と対立するものではなくて、実は多神教とともに共存するということもお話ししたいと思っております。どちらも、みなさんにとっては違和感があるかもしれません。しばらくご辛抱をお願いいたします。

また、ここでエジプト学の特有な側面をあらかじめ少し述べさせていただきます。

エジプト学は当然ですけれども、古代エジプトを研究の対象にしております。そこで、ややもすればエジプト学者はエジプトのことだけを考えており、近隣の地域や異なった時代の研究の成果を取り入れることなく特殊なエジプト像をつくってしまうことがあります。古代エジプト文明が既に滅びてしまった。しかも2000年も前に滅びてしまったために、たとえ間違ったこと、おかしいことを言いましても、誰も苦情は言ってこないわけです。

エジプトについて多くの書物が出ております。専門家として首をかしげるものも多くあります。これはエジプトへの関心が高いということだろうと思います。ただ、私自身の勉強不足から、今日、同じように首をかしげるようなお話をしてしまうのを恐れております。勇気をふりしぼってお話をさせていただこうと思っております。

今日は神々や宗教について扱いますけれども、宗教をテーマとして扱うことはたいへん難しいものがあります。個々人の考え方が大きく異なっており、万人が納得できる結論を出すということは事実上できないという事情があります。ましてや、聖書学やイスラーム神学の研究の蓄積の高さに比較して、私

がエジプトの宗教について触れるのは、かなりの冒険になります。この点、お話の前にお断りしておいたほうがよいように思っております。

エジプトの宗教は宗教資料に偏っており、歴史家を苦しめます。さらに、たくさん残っている宗教資料もずいぶん異質なものでして、われわれを苦しめます。断片的であり、しかも暗示的です。何らかの儀式の一場面、来世の一場面の描写、来世への旅の一場面などが中心です。エジプトの宗教には体系性がないという言い方がしばしばされております。

やっと、エジプトの神々についてのお話に入りたいと思います。

みなさんは、古代エジプトの神々、あるいは、もう少し広く宗教についてどのようなものを思い浮かべておられるでしょうか。おそらく、こういう形のものを思い浮かべておられるのではないかと思います。

これはエジプトの新王国時代、第19王朝のラムセス1世という王の墓に描かれているものです。中央に亡くなった王、ラムセス1世がおりまして、右手にはミイラづくりの神、アヌビスがおりまして、左手には王家の神であるホルスという神がおります。

アヌビス神、この右手にいる神ですが、当然ミイラにかかわるという意味で、死後にかかわる神です。ホルス神はエジプトの国を支配している王の守護神です。あるいはもっと言えば、亡き王の跡を継いだ若き王と言うこともできます。

これがホルス神ですが、頭にエジプトの王がかぶる冠をかぶっております。この冠を二重冠という言い方をしています。エジプトは、ナイルの上流部分である上エジプトと下流部分である下エジプトの二つの国からなっております。エジプトの王はこれら二つの国の支配者であるために、それぞれの地域を意味する冠の両方をかぶっているわけです。白い冠が上エジプトの王の冠であり、赤い冠が下エジプト王の冠になります。

この場面は前後の関係がわかりませんけれども、亡くなった王が生命の世界、ホルス、それから死後の

世界、アヌビスの中間にいることをあらわしています。

象形文字も書かれています。読んでみてもがっかりするだけです。何かありがたいことでも書いてあるのかなと思うのですが、ラムセス1世の名前、メン・ペフティ・ラー。そして、ラムセスという名前。「オシリスのもとで正しき者」というタイトル、その程度のものしか書かれておりません。こちらにも何か書いてありますが、ホルス神と書いてあるのみです。こちらは、アヌビス神と書いてあるのみです。懸命になって読みましても、役に立つ情報がなかなか手に入らないので、エジプトの勉強はいらいらすることがあります。

次いで、エジプトの宗教についての書物を見ますと、だいたいこういう神々のリストというのが出てくるかと思います。

1番目にいるのはアメン・ラー神。これは都テーベの神であるアメンが太陽の神ラーと結びついたもので、古代エジプトで最も有力な神でした。そして、次にはアヌキスという女性の神が出ております。この神はあまり知られておりませんが、エジプトでも一番南にアスワンという場所があるのですが、そこの女神のようです。そして、次にはアヌビス。これは先ほども出てまいりました。死者をミイラにする神であり、古代エジプトで最もよく見られる神です。犬の姿をしているのは、おそらく墓場に犬が徘徊していたところから、葬祭に関連づけられたのではないかと思います。日本ではすっかり野良犬というのを見なくなりましたが、いまでもエジプトに行きますと、たくさんの犬が飼い主もいない状態で自由に生きております。

あとで少しお話をいたしますけれども、私はサッカという場所で調査をしています。これは昔の墓場ですけれども、そこでは毎朝、えさをねだって何頭かの犬がやってきます。古代の墓場でも、お参りの人をあてにして犬が棲み着いていたのではないのでしょうか。そこでは、いまでは観光客、昔でしたらお参りの人がえさを与えており、そこからミイラづくりの神になったのではないかと思います。ち

なみに、参考までに申し上げますと、多くのエジプトの犬は狂犬病を持っておりますので、もし行かれました、くれぐれも安易に手を出されないようにご注意ください。

そして、こちらはバステトという神です。ライオンの姿をしており、攻撃的な性格を持つとされています。次は、シューという神ですが、大気の神です。宇宙のなかに生まれた世界、その空間をあらわしています。宇宙の混沌があり、そこにぼかんと空間が生まれる。そこがわれわれの世界です。その空間の神ということになります。

続いて、ハラクティという神、あるいはハロエルスという神、あるいはハルポクラテという神がおります。ここで言う「ハラ」「ハロ」「ハル」というのはホルス神のことです。ホルス神は王の守護神であり、王のことを指すこともありました。このホルス神のいくつかの特徴をとらえまして、このように異なった名前と呼ばれる場合もあります。

たいへん紛らわしいのですが、ここにハルサフェスという神がおります。こちらも「ハル」というのがついているのですが、この「ハル」はホルス神ではありません。

ご覧のように、男の神々、女の神々がさまざまな装飾をしています。また、犬や鷹の頭をした神、羊の頭をした神がおります。ネクベト女神は禿鷲の頭をしています。おそらく、みなさま方の多くはエジプトの神々というと、こういうものを思い浮かべられるのではないのでしょうか。

さらには、こういう神もおります。人間の身体をしているのですが、頭には昆虫をつけている神です。これをケプリといいます。この昆虫は甲虫のフンコロガシなのですが、復活のシンボルとしてエジプトではたいへんよく使われます。いままで出てきましたような動物の頭をしている神は、まだ多少理解できないわけではないのですが、昆虫の頭をつけているとなると、もはやわれわれの理解を超えてしまうこととなります。この昆虫は復活のシンボルとして

よく使われてまして、いまもエジプトの展覧会がありますと、土産物屋で必ず売っております。エジプトに行きましても、よく売られているものです。

このような多様な姿を許容するエジプトの宗教は、姿が変わっているというだけではなくて、同じ神を表現する際に、あるときには完全に人間の姿で表現することもあります。しかし、頭だけを動物で表現するときもあります。あるいは、さらに、完全に動物、昆虫であらわすこともあります。エジプトの神々はいろんな姿があるだけではなくて、同じ神に関しても、その姿を統一するということをしなないわけです。

このような、不思議で無原則とも思える神々がエジプトの神殿での壁画、あるいは王や民間人の墓の壁画、あるいは『死者の書』などの宗教文書にあふれています。そして、われわれは、こういうものを見ますと、はじめは違和感を持つのですが、そのうち、すぐに慣れてしましまして、エジプトというのは神秘の国であると思ってしまう。そして、それ以上の疑問を持たなくなってしまうわけです。

ここで、少し皮肉を出してみたいと思います。こういう神々に対して少し述べている人間がおります。ルキアノスという人物です。紀元後2世紀、ローマ帝国の時代のギリシア人なのですけれども、彼は風刺作家としてたいへん有名ですが、エジプトの神々について次のように述べております。少し読んでみます。

おい、おまえはな、
犬面でリネン製の着物のエジプト人め。
おまえはいったい誰かね、たいした紳士め。
わんわんと吠えながら
どうして神の資格があるというのだ。
——これは先ほど見ましたアヌビス神のことを指しているのだらうと思います——
いったいどういうつもりで
このまだらのメンフィス産の牝牛が崇められ、
神託を下し、預言者を持っているのだ。

どういう計略をもって知らぬが、
エジプトから天上へねじ込まれたイビス鳥や、猿
や雄ヤギや
そのほか、もっともっと笑止千万な者どもは言う
も汚らしいわい。

これは『神々の議会』という作品の一部なのですけれども、この発言をしている人物は神々の世界にふさわしくない者が神々の世界に入り込んでいると批判しておりまして、その矛先をエジプトの動物の姿をした神々に向けているわけです。

ここでは二つのことが言えます。ギリシアやローマの古代世界では、イシス神をはじめとして、多くのエジプトの神々が受け入れられ、人気があったということ。しかし、そのような状態を冷静に考えるならば、エジプトの神々は理解できない、神々にふさわしいものではないという疑いの目を向けられていたということだろうと思います。不思議なものに対する関心や人気、そして疑いというのが同時にありました。不思議なものは、単純にその不思議さから信じられていたかもしれませんが、あるいは、何か不思議な、見てくれ以上の隠された秘密があるかもしれない、そういうふうに思われていたかもしれません。しかし、いずれにいたしましても、当のエジプト人が考えていた神々とは異なっていた可能性があります。

現在のわれわれも同じ気がいたします。不思議なところに関心を持つ。変わっていると思って関心を持つか、あるいは、まったくばかげているとして相手にしないかというようなことではないのでしょうか。ひょっとすると、そのような不思議でおかしなものなかに、実は隠されている真実があるかもしれないと考えられる方もおられるかもしれません。今日はこういった見方を踏まえて、古代エジプト人は神をどのように見ていたのかというのを少し見てみたい、冒険してみたいと思っています。

古代エジプト人にとって、基本的に「神」とはどういうものであったのでしょうか。神というのは、エジ

プト語の文字では、ここに出ているような形で描かれています。

これは布を巻いた棒です。この棒は、神殿のような神聖な場所に置かれていたものです。風が吹けば旗がぱたぱたと動くことによって、そこに神がいると体験されたことが最も基本的な意味合いであったと一般的にエジプト学者は信じております。もちろん、エジプト人は風によって動いたのではなくて、そこに神がいるから動いたと考えたはずです。もしこのように考えれば、エジプト人が本来、神に何か固定した姿、ライオンであるとかワニであるとか、そういった固定した姿や形態を考えていたのではないというふうに思えてきます。あるいは、人間の胴体に動物の頭だけをつけているものもあります。それは、何かがそこにいるという感覚が神であり、それを姿にあらわそうとすると、あるときには人間の姿であらわし、あるときには人間に動物の頭をつけた姿であらわし、場合によっては動物そのものの姿であらわしたということも納得できるように思います。

神々の姿というのは、古代エジプト人にとって表現上の工夫であり、決してこだわりがあるものであったとは思えません。ラー神がこういう姿でなければならない、オシリス神がこうでなければならない、セベク神がこういう姿でなければならないというこだわりはなかったように思われます。そこに何かがある、そこに神がいる。そのときに感じられる力がライオンの攻撃をする力であったり、墓場で感じられる死の力であったり、あるいは植物が持っている再生する力であったりしたわけです。その特性によってライオン、犬、あるいは、緑色の肌で神を描くことがあるのですが、そのような形態、あるいは特色がシンボルとして使われていたように感じます。

このような旗の性格は、エジプトがその歴史の初めの段階、すなわち文字が使われ始めた初期の段階だけではなく、高度な社会を形成してからも忘れられることなく使われていきます。

エドフという場所があるのですが、これはエドフ

の神殿を正面から見たものです。これは、エジプトの典型的な神殿です。新王国時代以降、エジプトの神殿はこういう形式を持っています。手前には塔門があります。ここには王が描かれており、王が敵を打ち倒しています。このへんには打ち倒された敵がいます。こういうモチーフが描かれるのが通常です。神殿は、混沌の世界に浮かぶ聖なる空間です。宇宙が始まったときには混沌がありました。これは何もないけれどもすべてがあるという混沌であったのですが、そのなかに浮かぶ神聖な場所が神殿になります。外界から悪事がやってくるかもしれませんが、この塔門で悪いものを防ぐという意味があって、塔門がこういう形になり、そして敵を打ち倒すデザインが描かれていたはずで

す。そして、旗がこの塔門に備えつけられています。おそらく、この旗は単なる装飾ではなくて、神の現在、神がそこにいるということを示しているのではないかと思います。単に旗が風で動いているのではなくて、神がそこに現れている。そういうことを意味しているのでしょう。

エジプトの神々を現代人の目から見て、その姿や形態がおかしいと言うのはやさしいのですが、それでは古代エジプト人が感じていた神々を知ることにはできないでしょう。どうもエジプト人は神々の姿にこだわらないようだ、われわれは思い始めるわけです。われわれはどうも早とちりをしているのではないかと。エジプトの神殿で儀式をしている場面、葬祭の場面、そういうのを見て、そこに表現されているのが神々だと思ってしまっているのではないかと思い始めるわけです。

さて、これは何でしょう。ギザの三大ピラミッドを上空から見たところです。先ほど、早とちりをしているのではないかという話をしたのですが、早とちりの関連で、ちょっと脱線いたします。

ときどき映画を観ておりますと、ピラミッドが出てくるのです。エジプトからテーマをとった映画があるのですけれども、そうしますと、ピラミッドは砂漠のまん

かにそびえ立っているわけです。これはたいへんな驚きです。ピラミッドというのは、建造の過程で石材を船で運んできます。ですから、ピラミッドは、かつて水があって、運河があって、船が通れるところにあるわけです。砂漠のまんなかには決してありません。

みなさまのなかにもエジプトに行かれる、あるいは行かれた方がおられると思いますけれども、年間にして、だいたい6万人から7万人の日本人がエジプトを旅行していると言われております。ちなみに、京都の伏見稲荷神社では、初詣に来られる方が250万人ぐらいというふうに聞いたことがありますので、これを比較すると何ともなのですけれども。しかし、エジプトの知名度というのが高いものがあります。誰でもエジプトについて知っている、あるいはピラミッドについて知っているとつい思ってしまうわけですが、ところが、ピラミッドがこのような町なかにあるとはなかなか思われていないようです。

これは高度1万4千フィートとありますから、4千メートルぐらいのところから撮ったものです。ちょっと写りが悪いかもしれませんが、ここにあるのがクフ王のピラミッドで、高さが150メートルぐらいです。これが一番高いものです。次にあるのがカフラー王のピラミッド。ほぼ同じぐらいの高さですが、多少低いですね。そして、メンカウラー王のピラミッド。これは小さい。60メートルぐらいですが、ここに並んでおります。

そして、昔はこのあたりまで水が来ておりました。増水のときには水が来ていた、あるいは運河をつくって船がやってきていました。ですから、このあたりに船着き場があり、そこから石材を運んで、いまのピラミッドをつくったわけです。ここ、ピラミッドの横に実はゴルフ場があります。

そして、さらに、もし行かれましたら、多くの人は、どのへんでしょうか、このあたりに連れてこられます。ピラミッド三つを写真に収めるのにいいポイントだそうでした、だいたいここへ連れてこられて、記念写真を撮ることになるのですが、ふと横を見ますと、ここに大きなニュータウンがいま開発されてお

す。これは新しいものです。決して古くはありません。最近、エジプトは人口がどんどん増えておりますので、あちこちで大きな町を開発しています。ピラミッドがてっきり砂漠のなかにあるのかと思ったら、手前がもう町ですし、もともと砂漠であったところも大きな町ができています。

早とちりの関連で、少し脱線をいたしました。

さて、エジプトの「神」の基本的な意味合いについては先ほど少しお話いたしました。これも少しそれるのですが、では日本語ではどうなのかなと、素人ながら手元の辞書を引いてみました。

スクリーンに赤字で出していますが、漢字では「神」と書きます。この漢字の左の部分、このことなのですが、神が降臨する座、場所があって、ここにいけにえを捧げて、その血がこういうふうに滴っているというのが本来の意味のようです。これだけで神を意味するようですね。さらに、この右のほうですが、この字は稲光のさまをあらわしているということのようです。ですから、本来日本語でわれわれが使っている神というのは、雷の神、あるいは天の神、そういう意味であったはずで

す。このようなことを今日、われわれは意識しているでしょうか。これは漢字である、だから日本の神ではなくて中国のものであらうとか、あるいは、日本には日本の表現もあるだろうとか、いろいろな意見もあらうかと思うのですけれども、現実にはわれわれは「神」として、この字を使っているわけです。

神の定義を集めれば、際限なく集まりますから、素人の私がこれ以上深入りをするつもりはありません。ただ、こういう言い方はできるかと思っています。エジプト語の「神」の表記はエジプトの歴史3千年をとおして、先ほど見ていただきました旗を完全なカタチで表意文字として使い続けています。そのため、古代エジプト人はその本来の神の意味、われわれは漢字で神の意味を既に忘れていますが、神殿にあって旗がぱたぱたとするところ

に神が現れるという本来の意味を3千年間、ずっと

持ち続けることができた。こういう言い方ができるのではないかと考えています。

この点で、象形文字を起源に持ちながらも、本来の意味合いをほとんど意識しなくなった日本語、あるいは漢字と違うところだろうと考えています。

本来の神の意味を意識し続けたということがエジプトの神々の特色をつくっているということは、もう一度あとで触れたいと思っています。

これは、象形文字で書かれたワニの神、ソベクです。力強さを体現しているのでしょう。ただし、これはそれほど単純ではなく、あとでもう一度説明したいと思います。

その右手にあるのが、神の決定詞です。決定詞が何であるのかというのはここではお話しできませんけれども、何らかの神の名前のうしろにつく記号でして、その単語は神であるということをあらわしています。先ほどのソベクという神でも、ソベクという発音を書く、そのあとで、これが神であるということを示すために、この文字をつけるわけです。

エジプト語は象形文字を使いますが、表意文字だけではいかなる言語でも文章は書けません。古代エジプト語でも、表意文字だけではなくて、発音記号をたくさん用いて、そして補助的に決定詞、表意文字を使ってあります。いずれにいたしましても、この神の決定詞は、神がいかなるものであっても、人間の姿でも表現されるということを前提にした用法だろうと思います。

こちらは太陽神、ラーです。太陽を頭につけた人間の姿で表現されています。太陽の属性、あるいはその力を表現したものでしょう。この神は太陽そのものであらわされてもかまいません。右手のほうはホルス神、これは完全に鷹の姿で表現されています。天空を自由に飛び、獲物を狩る姿は支配者にふさわしいものでした。

さて、いろいろ見てまいりましたが、ここからはエジプトの歴史を古いところから新しいところに進いながら、いままで見てきました基本的なエジプトの

「神」の意味合い、そして、驚くほど柔軟な側面を見ながら、最終的にはエジプト的な一神教へ発展していく、その流れを見ていきたいと思っています。

いま見ていただいているのは、「ナルメル王のパレット」と言われるものです。エジプトが二つの国からなると先ほど申しあげましたが、これは二つの国が統一されたことを記念したパレットだと言われています。紀元前3000年ごろのお話になります。ここに首の長い動物が2匹、首をからませてありますけれども、これはエジプトの二つの国、上エジプトと下エジプトが統一されたということを意味しております。

さらに、それだけではありません。ここにいる王ですが、これは上エジプト王の冠をかぶって、そして敵を打ち倒しております。そして、こちらには同じ王が下エジプト王の冠をかぶっております。そして、この王は敵の首をはねて、それを検分しているわけです。これは、戦争に勝利して二つの国を統一した記念のパレットだと言われております。

さらに、ここに鷹がおりますけれども、これがホルス神です。人間の姿に鷹の頭をしていてもいいのが、ここでは完全に鷹の姿であらわされています。このホルス神は、ここにパピルスがついたものをロープで引っ張っていますが、一般的にこれは下エジプトを意味していると言われてます。下エジプトというのは沼地ですので、こういうパピルスがいっぱい生えているのです。ですから、下エジプトを王の守護神ホルスがつかまえた、つまり征服したということを意味している。そして、このパピルスというのは象形文字で千をあらわしますから、ここは記憶が正しければたしか6本ありますので、上エジプト王はその守護神とともに下エジプトを征服し、そして6千人を捕虜にしたというふうに解釈をされています。これがエジプトでも一番古い資料になります。ここにはホルス神は鷹として表現されております。

ここで、私が現在エジプトで行っております調査の話、文化財の修復の話を少しさせていただきます。

神の話もそのなかに入りたいと思っております。

私どもは、イドゥートのマスタバというものを調査しております。紀元前2360年ごろにさかのぼりますから、4千年以上の昔のものになります。このサッカという場所なのですが、ギザに隣接した地域でして、古代エジプト時代の3千年にわたって使われた最大の墓域、墓場になります。

ギザというのは三大ピラミッドがあつたいへん有名なのですが、実は考古学者とか文化財をやっている人間にとっては、それほど重要ではありません。重要ではあるのですが、実は、それほど遺跡の数が多くないのです。ギザのピラミッドがあつて、あとは、それほど多くない。ところが、その横にあるサッカというのは、先ほど言いましたように、3千年間使われましたから、遺跡の数がたいへん多い。考古学者、文化財の人間にとっては、実はサッカのほうがたいへん興味深いわけです。

ちょっと自慢もしたいと思います。このサッカの中心でわれわれは活動しています。遺跡群の中心で活動しておりまして、場所がいいということ、それから、いま申しあげましたように、紀元前2360年ごろという古王国のものを扱っています。日本の調査団もいくつかエジプトに行っているのですが、こういう古王国のものを扱っているのは実は関西大学だけです。

このうしろに見えておりますのは、このサッカのランドマークである階段ピラミッドです。そして、この手前にあるのがイドゥートのマスタバです。マスタバというのは、こういう形をした墓のことを言っております。このマスタバの地下の埋葬室の修復を現在、進めているわけです。残念なことに、このマスタバは10年ほど前までは公開されて見ていただけたのですが、いまは閉鎖されておりまして見ていただくことはできません。

ここに高さ60メートルほどの階段ピラミッドがあります。これがエジプトで最初のピラミッドでして、その後、試行錯誤を経ましてギザのピラミッドという形

に進化していきます。私はピラミッドのいずれも好きなのですが、このピラミッドもなかなか味がありまして、いいものです。みなさんも、機会がありましたら、ぜひ一度ご覧になっていただきたいと思います。その際、イドゥートのマスタバにもぜひお越しください。中には入れないのですが、周辺には見ることができるマスタバも多くありますので、時間をかける価値はあろうかと思えます。

これも少しわかりにくいかもしれませんが。これがランドマークの階段ピラミッドになります。われわれが調査をしているイドゥートのマスタバというのは、ここになります。エジプトに行かれましたら、ここに道がありまして、観光バスで走ってきます、そしてここに駐車場があります。ここで降りまして、みなさんはここを通って、ここに入って階段ピラミッドの写真を撮られます。そして、次にはここへ回ってきて、実はダハシュールのピラミッドというのがこちらに見えますので、これを撮られる。その足元で関西大学が調査をしているということになります。

さらに、サッカではこのあたりに、別のピラミッドがあります。あるいはマスタバがありまして、サッカに来られますと、この地域とこの地域の二つを見ていただくことになります。

これはもう少し拡大したものです。これが調査をしている場所ですね。何でしたら、ぜひお越しください。閉まっておりますけれども。ただ、こちらの二つは開いております。このへんはオープンで自由に見ることはできますし、こちらの端っこのほうには、あまり観光客の方は来られないのですが、いくつか開いた墓がありまして、なかなか興味深いものです。サッカはエジプト最大の墓域ですから、2、3日でも時間を過ごすことができます。ツアーで行きますと、なかなか自由がきかないのですが、ぜひお越しになっていただきたいと思います。

そのとき、ちょっとチップを出さないといけないと思います。エジプトへ行きますと、チップの話がいつも悩ませてくれるのですが、本来高い入場料を

払っておりますから、チップを払う理由はないのですけれども、その高いお金が彼ら門番のポケットに入らないものですから、通常、そういうところに行きますと、日本円で言うと5円とか10円ぐらいですが、チップを渡すことになります。かなり高い入場料を出すので、おかしな話なのですけれども。エジプトでチップの与え方がわかるまでには、ずいぶん時間がかかります。私自身、いまだにチップの与え方のコツがなかなかわからないわけです。

これが、調査をしている地下埋葬室の入り口になります。ビルの3階ぐらいの高さから三つはしごをつないで、そのまま降りていくことになっています。最初は怖かったのですが、いまでは慣れまして、すいすいと上り降りすることができます。ここが13メートルぐらい、どこから計算するかによるのですが、ビルの3階ぐらいの高さから下へ降りていくことになります。埋葬室の中に入りますと、だいたい4メートル半ぐらい、そして10メートルちょっとぐらいの広さになっています。天井にはクラックが走っていき、落盤する危険がありまして、古代エジプト人自身がこういう柱をつくっております。ただし、1本の石でつくればよかったのですが、こういうブロックでつくっておりますから、いまでは崩壊してしまっております。

ここに当初入りましたときには、当然盗掘をされていまして、ミイラのリネンが散乱しておりました。そのあと、われわれは清掃をしまして、壺であるとか土器であるとか、いくつか見つけております。これは清掃をしたあとの写真になります。

どういう絵があるのかといいますと、石灰岩の壁にプラスターを塗りまして、その上に絵を描いております。これは牛です。牛の肉は一番のごちそうになりますので、牛の肉を描いている。あるいは、ビール瓶。これは蜂蜜とかワインとか言われていますが、そのたぐい。あるいはパンのたぐい。これもパンですね。これは、ウリとかスイカと言われています。こういった食べ物絵をただただ並べております。

エジプトでも、新王国時代になると神々の姿を描くのですけれども、この古い時期では食べ物絵を描きます。これが当時のデザインになっています。

4千年間、太陽の光が当たっておりませんから、絵はたいへん美しい。当時の色が残っているわけです。ただし、正面から見るとたいへんきれいなのですが、ちょっと斜めから見ると大変なことになっています。石灰岩といいましても、本当に岩と言えるのかどうか怪しいような、もろいものでして、塗ってあるプラスターというのはこういうふうには波打って、いま剥落しつつあるわけです。これは、あと何十年かもしれば完全に落ちてしまうだろうと思います。

そこで、いま関西大学はエジプトと共同でこの壁画を救おうということで、剥ぎ取って修復する作業をしております。本来は、文化財というのは現地で修復し、勝手に剥ぎ取ったりしない。それがあってここで、そのまま修復するというのが原則です。

こういう場合どうするかといいますと、この浮いているところ、これはこのまま浮いていると落ちますので、浮いているところにプラスチックを入れます。これはどこの文化財でもやっている、ごくごく普通の方法です。透明のプラスチックをアセトンとかトルエンとかいう有機溶剤を中に入れて溶かして、そして、それを注射器に入れて、このあいだに溶けたプラスチックを入れるわけです。アセトンとトルエンが飛んでしまうと、ここで固まってしまふ。これが、普通どこでも、世界中でおこなわれている修復方法でして、できるならそれが一番いいのです。

ただ、ここでは母岩がぼろぼろで、それができないと考えましたので、われわれはやむを得ず、これを剥ぎ取るということを現在やっております。このままでは剥ぎ取れませんので、絵の表面に和紙を張り、レーヨン紙でもけっこうです。あるいはコットンでもけっこうです。要するに何かを張って絵の表面を固めてしまってから、うしろからナイフで剥がし取っていくことをしております。固めるときに、日本の技術である、ふのりという、海藻の一種の

りを使っているというのがわれわれのミッションの特色になっています。ときどき新聞に載せていただいておりますので、場合によったら見ていただけるかもしれません。こういうこともやっていますということでご紹介申しあげました。

「神」の話もしておかないといけません。

いままでのお話は地下の埋葬室についてでした。先ほど言いましたように地下13メートルのところに、この埋葬室があります。一方、地表部分には部屋がA、B、C、D、Eとあります。ここにたいへん美しいレリーフが残されていますが、特に奥の部屋が当然大事であって、その西側が大事ですから、年に数回、お祭りのときには親族がやってきて、お祭りをおこなっていたのだらうと思います。

レリーフはこういうふうには描いています。ここにいるのがイドゥート、女性ですね。ハスの花を手にもって、おしゃれな服装をし、髪をまとめています。舟の上に立っていて、緑豊かな沼地の鳥とか魚を見えています。そして、そのうしろにはいろんな役人が控えています。

ここで、神の関係でお話をしたいのは、ここに書いてあるものです。大きくしたのがこれです。いまふうの発音をしますと、「イマクート・ケル・ウシル」、「イマクート・ケル・インプウ」、「イマクート・ケル・ネチェル・アー」、「イマクート・ケル・ネスウ」と書いてあります。

この部分なのですが、左から右へ読んでいきます。「オシリスのもとで尊崇される者」、「アヌビスのもとで尊崇される者」、「大いなる神のもとで尊崇される者」、「王のもとで尊崇される者」、こういうふうには書かれています。「尊崇される者」、これはイドゥートについているタイトルなのですが、死者につけられるごく普通のタイトルでして、べつに深い意味はありません。死者を神々のもとで称えているということになります。

ここで、オシリス、アヌビス、大いなる神、王という並べ方に関心を持ちます。ここで言う「大いなる神」という表現は、いったい誰を指しているのでしょうか。

まず、オシリスがいます。アヌビスがいます。ということは、この大いなる神というのは、それに相当する別の神なのではないでしょうか。そして、これを飛ばして王というのがいます。王というのも問題はありません。王はエジプトでは神であり、そして、家臣の面倒を見る。生きているあいだも死んでからも面倒を見ますから、王のもとで尊崇される者という肩書きも問題がありません。では、この大いなる神というのは、いったい誰なのだろう、そういうふう思うわけです。もし王であれば、ちゃんと書くべきでしょう。あるいは、ほかの神であっても、こういう名前を隠す必要など本来はどこにもないわけです。これがわからないわけです。うがって言えば、この「大いなる神」というのは、特定の何らかの神ではなくて、名前のない、隠れた一なる神、あるいは真の神と考えたくもなってくるわけです。

このような事例というのはイドゥートだけではなくて、実は多くの墓で見ることができます。「大いなる神」というのはあちこちで使うのですけど、その神が誰なのか実はわからないわけです。またしても、エジプトでは神というのは姿もよくわからない、どうも名前とかもよくわからない、どこかに隠れているのではないかというような雰囲気が、あちらこちらでするわけです。

いまのは古王国の例でした。次に、中王国のお話をいたします。

中王国になりますと、変身の呪文というのがたくさん使われるようになります。新王国になってもよく使われます。博物館、あるいは展覧会へ行かれますと、死者を納める棺というのがたくさん出てくるのですが、その棺に書かれている呪文、あるいは新王国時代になってきますと『死者の書』、そこにたくさん書かれています。いろんな呪文があるのですが、そのなかで人気のあった呪文が変身の呪文なのです。これは、死者がこれを唱えることができれば、自由にあらゆるものに変身できるということを言っています。

少し気をつけないといけないのは、これは仏教で言う転生とは関係ありません。エジプトの変身は自由に変身し、いつでも別のものにまた変身し直すことができます。仏教のように、あるものに生まれ変わったら、生まれ変わったものとして一生を遂げなければならないという理由はありません。気に入ったら別のものに変身し、また、別のものに変身する、それが可能であるわけです。

いっぱいあるのですが、いくつか出してみました。「鷹に変身すること」。これはタイトルなのですが、これはいいでしょう。死んだあと自由に空を飛べる、こういうものに変身してもいいだろうと思います。次に、「ガチョウに変身すること」。こういう呪文もあります。ちょっと頭を抱えてくるのですが、ガチョウ。ガチョウといいますと、エジプトでは供物ですから、ガチョウに変身したのはいいのだけど、捕まって首を切られて、肉になって食べられてしまうのではないか、そういう気もしまして、ちょっと怪しいなと思いは始めるわけです。あるいは、そのほかに「ヘリオポリスの案内係に変身すること」というものもあります。ヘリオポリスは太陽神ラーの町ですから、太陽神ラーの案内係、何か一つの役職でしょう。これに変身する。これはわからないでもない。あるいは、「ラー・アトム神の書記に変身すること」、こういうのもあります。まあ、いいでしょう。

わからないのは、「下エジプトの大麦に変身すること」、あるいは「空気に変身すること」。これはみなさん、どうでしょう。みなさん、変身したいと思われるでしょうか。これはわからないですね。下エジプトの大麦に特殊な意味があるのかもしれませんが。空気にそんな特殊な意味があるのでしょうか。私は勉強しておりますけれども、まだまだ勉強不足でして、わからないことだらけです。これも謎です。少しずつ勉強していきまして、また機会がありましたら、実はこんな素晴らしい意味があるというお話ができればいいのですけれども、いまのところ首をかしげているわけです。

もっとも、ここでお話ししている神々のことに関して言いますと、こちらのほうに関心を持ちます。「トト神に変身すること」。トトというのは知恵の神です。ですから、これに変身するのはいいでしょう。「ホルス神に変身すること」。ハトホル、これはホルスのお母さんですが、「ハトホルに変身すること」。あるいはネヘブカウ、これは魔法使いですが、「魔法使いの神に変身すること」。あるいは、マート、これは正義の女神ですが、「正義の神に変身すること」。こういったものがたくさん出てくるわけです。

ちょっと考えると、何か変だなというふうに思ってくるわけです。エジプトが神秘の国だと思ってしまいますと、それほど違和感を持たないのですけれども、人間が神になると言っているわけです。これは憑依、憑霊、とりつきという言葉がありまして、人間の中に神が入ってくるというような発想が日本でも、あるいはよその国でも、あちこちにあるだろうと思うのですが、人間が神になると言っているのです。それもトト神とかホルス神とか、第1級の神になるというのはたいへん不思議でして、人間が神になるという発想は、それほど多くの国にはないのだろうという気がします。男性が女性の神になる、マート女神になるということも違和感なく述べられています。

さらに、このへんがエジプトもここまで来たかという感じがしますが、「人が望むすべての神、あらゆる神に変身すること」、そういうふうにも言われています。このへんの節操のなさというのがエジプトの大きな特色です。体系性がないとか、そういうことをよく言われるわけです。

エジプトの神というのは、既に見てきましたように、姿とか形態というのにはあまりこだわりませんでした。さらに、その神格があいまいです。王だけではなくて、普通の人間との境目も、たやすく乗り越えられていくわけです。その程度があまりにも甚だしいという気がいたします。普通の人間が神になると言っているのです。

こういう変身の呪文の具体的な例を一つだけ

挙げておきたいと思います。ゆっくり読んでおきます。『コフィン・テキスト』といいまして、棺に書かれている呪文ですけれども、その285章です。ソベクというワニの神への変身です。

「うねった水路の主への変身」

わたしは沼地の柱であり、島々を横切る者であり、顔つきの鋭い者であり、岸辺を横切る者である

——ワニのことですから、これでいいでしょう——

わたしは性交するときも食べる者である

——食欲で、何でも食べるということです——

わたしは大いなる者を食べ、わたしは彼のうろこを食べて生きる

——大いなる者というのは、沼地の底に住んでいる魚のことを指します。それを食べて生きている——

そして、彼の知っていることで彼を力を得ていたものによって生きる

わたしは水中にいる大いなる者たちを食べて生きる

川の中にいる大いなる生きものたちはわたしを恐れる

わたしを守れ

わたしに気遣え、水の中にいるケドゥの魚たちよ

わたしを敬え、川の中にいるケドゥの魚たちよ

わたしは飛び跳ねる者であり、水の主であり、わたしはソベク神、

うねった水路の主である

ここで何を言っているのかといいますと、先ほど言いましたように、沼地の底には宇宙の始まり、混沌がいまだに残っている、あるいは、そのエネルギーがいまだに残っている。ですから、沼地の底に住んでいる、ここで言うケドゥの魚たちというのは、そういうエネルギーをいまだに持っているわけですね。それをソベク神が食べることによって、エネルギーあるいは知恵を奪い取るというわけです。

ソベク神というのは、単にワニとしての力が強いというのを体現しているのではなくて、宇宙の根源のエネルギー、知識を持っている神であるわけです。ですから、そういう神に変身したいというのはわからないわけではありません。先ほど言いましたように、わからないものもたくさんあるのですけれども。

さらに、新王国時代のお話を少しさせていただきます。

これは、ルクソールの王家の谷にある、王の墓に描かれているものになります。『アム・ドゥアト』という名前の文書になります。王がここにあります。船に乗りまして、西の世界に入って、地下を12時間かけて通りまして、そして12時間目に東の地平線に出てきて復活する、そういうモチーフです。太陽神がおります。いろんな神々が船を引っ張っております。亡くなった王は、これにあやかって太陽神の船に乗って、太陽神と同じように毎日西へ沈んで、毎日死ぬのですが、毎日東で復活する。そういう復活の仕方をしようという意味で描かれているわけです。

ここにちょっとしたものがあるのですが、これはオシリス神の墓です。両わきに鳥がしがみついておりますが、これはオシリスの妹、イシスとネフィティスです。オシリスの墓がここにあって、そこで死んでいるわけです。そして、ここに復活のシンボルである昆虫がおりまして、太陽神の船を引っ張っているわけです。これが一番大事な場面ですね。太陽神ラーが死者の神の塚に入り込んで、死者の神オシリスを復活させるという場面です。これは、王だけが使うことができた最高の神学です。

ちなみに、これは復活の場面ですので、この下にあるのは第5時ですから、下界の一番底に近いところなのですけれども、この穴に落ち込んでしまうと、そのまま際限なく底へ落ち込んでしまって、永久に復活できない。この部分では、それを防いでいるわけです。ですから、復活と永遠の破滅というのは紙一重であるわけです。

ここはたいへん暗いですから、これは炎ですね。

頭に炎をつけています。そして、扉がついており、入って来られないようにしているわけです。こういうものが出てくるのですが、ここで面白いのは、ここに出てくる神々です。

これは、先ほど言いましたように、神をあらわすシンボルです。ここにあるのは、上エジプト王の冠と下エジプト王の冠をかぶっていますから、おそらく亡くなった王たちだろうと思いますが、先ほど言いましたように、エジプト人は神の本来の意味、姿は大事ではなくて、そこにいるという意識をずっと失わなかったという言い方をしましたが、新王国時代にも同じように、まだ意識され続けているわけです。

ついからですから、もう少しこの下界の様子を見ておきましょう。すべてを見るわけにはいきませんので、第6時のほうを見ておきましょう。

先ほどの第5時で太陽神ラーがオシリスと合体しました。それによって、下界に生命が復活してきました。これがそうです。ここに死者がいるのですが、頭に復活のシンボルである昆虫ケプリがいますから、これは、いま復活しつつあるということです。太陽神ラーが船に乗って進んできています。

そして、ここにいる人たち、わかりますでしょうか。いすに座っているように見えるのですが、いすは描かれていません。この人たちは、いま復活して、身体を伸ばしつつあるわけです。第5時で太陽神ラーがオシリスと合体して、下界に生命が戻ってきました。この人たちは死んでいたのですが、いま復活しつつある。そういうことをあらわしているわけです。

そして、さらにここですが、これも象形文字なのですが、支配者という意味です。ここも、やはり姿を描かない。文字によって、これも王、あるいは神だと思ってくれるのですが、それを表現しております。エジプト人は形態、姿にはこだわらない。そういう性格がここにもよく出ているかと思います。ちなみに、下にちょっと出ていますが、これはナイフですね。敵が攻めてきたときの防衛のためのナイフを出しています。

そして、最後12時間目に飛んでしましますが、太陽神ラーがやってきて、これは復活のシンボルですが、東の地平線で復活しようという場面ということになります。

『アム・ドゥアト』では、壁画や彫像に見られない独特な姿や名前の神が多く現れます。王だけに許されていた文書として、当時最高の思想が表現されていたはずですが、実際にこの文書では、知識あるいは秘密という言葉がたいへん強調されていて、例えばセシェムという言葉があるのですが、これは日本語で言うと、依り代のようなものでしょう。神は真の姿はわからないのであって、何らかの像、絵にとりつくだと、そういう表現がこの『アム・ドゥアト』の書のなかでも何回も使われています。

エジプト人は神々に特定の姿を与えません。仮の表現しかしません。それさえ嫌がって、神の文字、あるいは支配者の文字で表現しようとしています。ここでは、太陽神はアメン・ラーと呼ばれていますけれども、羊の頭に太陽を乗せています。ここですね。本当に姿にはこだわらないところがあります。

さらに、もう一つ話をしておきたいと思います。神々の混交の話、シンクレティズムの問題になります。エジプトでは、よく神々を結びつけます。既に見ましたように、アメン・ラー、ミン・ラー、ソベク・ラー、こういった神々をいろいろ組み合わせています。

これも、少し考えると変なですね。うがって考えれば、ラーを軸にして、ラーとアメンがひっついていて。あるいは、ラーとミンがひっついていて。あるいは、ラーとソベクがひっついていてとするならば、このラーを軸にして、ソベク、ミン、アメンというのがみんなひっついてしまっているのですね。となると、はたして多神教なのだろうか、一神教なのではないのかという発想も出てくるわけです。

そして、このような混交は性差も乗り越えてしまいます。オシリスは男の神ですが、ネイトは女性の神です。ミンは男性ですが、ムートは女性の神。ホルスは男性ですが、ソティスは女性の神です。こう

いうふうに、神々をいともたやすく結びつけていくわけです。姿にはこだわられません。あるいは、神々も結びつけることに違和感がありません。ラーを軸にして神々、多神教というのは崩れてしまうのではないかと思うわけです。

あるいは、さらにプタハ、ソカル、オシリスという神々を結びつける、こういう場合もあります。面白いことに、この神を呼ぶ場合に「彼らが」と呼ぶ場合と「彼が」と呼ぶ場合があります。プタハ、ソカル、オシリスが一柱の神として合体しているのですね。その神を指す場合に、エジプト人は「彼らが」と言う場合と「彼が」と表現する場合とがあるわけです。このへんも、エジプト人がいったいどういうふうに考えていたのか。単数形で考えていたのか、複数形で考えていたのかわからないわけです。

以上、エジプトの神々、宗教、世界観の節操がないとも言える柔軟さを見てきました。これからは、エジプトでも一貫性のある説明を求めてくるようになります。

ドイツにアスマンという先生がおられまして、たいへん業績多い先生です。私はとても追いつかないのですが、大きな影響を受けました。そのアスマンという先生は、おおよそですが、簡単に言えばこういうことを言っております。社会に危機が起こりますと、それを乗り切るために事態を説明して責任を負う者、つまり多神教ではなく、一なる神を求めて一貫性のある神学をつくり出していこうとする。

少し話が飛びまして違和感を持たれるかもしれませんが、実はドイツのナチス台頭前後のことをアスマンという先生は念頭に置いています。あるいは、念頭に置いている業績をお使いなのです。

ワイマール共和国というのはみなさんご存じだろうと思います。古代史の話が近代史になってしまうのですが、極めて民主的な国家であったというのはご存じだろうと思います。しかし、この民主的な国家というのは、世界恐慌が起こったときに対応できませんでした。そのときの危機は、民主的ではな

くて権力を1カ所に集中しなければ乗り切れないものであったわけです。ワイマールの議員たちは、権限を持っておりますから神々なのですが、彼らは役に立たない、無力であるわけです。その代わりに総統が権力を掌握しないと乗り切れなかったわけです。乗り切れたのかどうか知りませんが、発想としてはそういうところに来るわけです。

彼の考え方では、一神教というのは多神教と対立いたしません。一神教というのは、多神教における危機の度合いを示す尺度ということになります。多神教のなかで危機が起これば、それは一神教の様相を持ってくるわけです。素朴な意味で言うと、われわれの人生のなかで失敗があれば、なぜなのか、どこに原因があるのか、どうすればいいのかということを考えるわけですね。そういうことをアスマン先生はおっしゃっておられまして、たいへん面白い発想だろうと思います。

エジプトでは、新王国第18王朝の時期に帝国主義、あるいは拡張主義というのが進められまして、エジプトの領土がどんどん増えていきました。しかし、この第18王朝の終わりごろには帝国の拡張は止まります。そして、そこで矛盾が噴き出てくるわけです。つまり、社会に危機が起こってくるわけですね。その危機に対応して一神を求める神学が一気におもてに噴き出てくるわけです。それが、世界で初めてと言われるアマルナの一神教であろうかと思っています。

ただし、このアマルナというのはイクナトン王というのが始めているのですが、彼はたいへん個性の強い王でして、権力を1カ所に集中するというだけではなくて、彼の個性を発揮し、変わった神をつくり出します。アテンという神のみを認めて、他の神々を弾圧する極めて強権的な政策をおこないました。そのとき、社会の矛盾が問題なのでから、抵抗勢力であるアメン神官団をやっつけなければいいわけで、やっつけるために別の神を引っ張ってくればいいわけですが、彼は極めて個性的にも、どの

神でもいいにもかかわらずアテンという神をひっぱり出してきました。

このアテンというのは、太陽そのものです。普通の神ではありません。普通の神を出してくれればいいのに、自然物を出してきたのは彼の個性です。これは「自然哲学」と呼ばれています。アテン神は口をききません。太陽として光で万物を養う。したがって、人間の悩みには無関心である、そういう神をひっぱり出してきたわけです。

その雰囲気をつかんでいただくために、少し読ませていただきます。

汝、アテン神は天の地平線にうろわしく現れる

汝、生けるアテン、生命を始める者よ

……

夜明け、汝が地平線に上るとき、

昼、汝がアテンとして輝くとき

汝、暗闇を追い払い、その光を与える

——光を放射するという事です——

……

女のうちに種子をつくり出す者

汝、男のうちに精液をつくり、その胎内に子を養い

その嘆きを鎮むるものをもて彼を慰むる者

——太陽の光を放射して、そして、それによってわれわれを生かせるわけです——

……

汝のつくりしこと何と多いことか

それら、人の目より隠されてあり、

おお、他に比類するものなき唯一の神よ

汝、思いのままに世界を創造せり

汝、ただ一人となりしときに

人、家畜、野獣ことごとく

地にありて足もて歩むものすべて

空高くあり、翼もて飛ぶものすべてを

アテン神が世界をつくったと言っています。

絵に描かれたものが、こういうものになります。こ

こにいるのが、口をきかない自然物としてのアテン神です。そして、そこから光を放射して、植物、家畜、人間を養うというものです。東から登り、西へ沈んでいく、そして生命を養う。これを「自然哲学」という言い方をしております。

権力を1カ所に集中させたいという動きに乗っているのですけれども、こういう変わった神を出したのは彼の個性でして、彼が死ぬと同時に、この改革は消えていくことになります。この「アマルナ」宗教というのは彼が死んだあと、すぐに消えていくわけですが、しかし、一度社会に危機が起こっている、誰かが責任を負わなければならない、そういう発想は受け継がれていくわけです。

「アマルナ」宗教の失敗のあと、エジプト学者が「個人の信仰心」と言う時代がやってきます。先ほどのように口をきかない、人間の悩みに関心のない神ではなくて、個人の悩みに答えてくれる神というのが前面に出てきます。

汝はアメン神、沈黙する者の主

不幸な者の叫び声にやってくる者である

わたしが困難にあるときに汝に呼びかけるならば

汝はやってきて、わたしを救ってくれる

汝は弱き者に意気を与える

汝はとらわれし者を救う

わたしのもとにやってきてください

おお、ラー・ホルアクティ神よ

汝がわたしの面倒を見るために汝はことをおこなうものであり

汝以外に行動する者はいない

多くの罪のゆえにわたしを罰しないでください

わたしが自身でことをわかっておらず

感覚のない男だからです

わたしのもとに来てください

汝、幾百万もの人を守り、幾十万もの人を救う者よ

汝、呼びかけてくる者の保護者よ

こういう形のものが、「アマルナ」の反動として出てきています。そして、一なるものを求めていく発想というのは、アスマン先生の言葉で言うと、汎神論的超越神学といったものにまとまっていきます。

三とは、すべての神々のことである。

アメン、ラー、プタハである。彼らに比すべき者はいない。

アメンとしてその名前を隠す者(単数形)は、その姿によってラーであり、その肉体はプタハである。

ここでは、たしかに神々を認めているのですけれども、認めたうえで、実はそのうしろに隠れている神がいるのだということを述べています。

はじめに、3とはすべての神々のことであると言っています。エジプト語、いまのアラビア語もそうですが、数というのは1があって、2がある。目とか耳とか足とか、そんなものですが、1があって、2があって、複数形は3です。ですから、3というのは複数という意味ですが、3とはすべての神々のことです。そして、アメン、ラー、プタハである。彼らに比すべき者はいない、と言っています。

次が面白いのですが、アメンというのは、もともと隠れているという意味があるのですが、アメンとしてその名を隠す者、つまり単数形の者が呼ばれています。そして彼は、自然界での姿においてはラーであり、そして肉体、これは神殿における肉体という意味ですが、プタハと呼ばれています。アメンという一なる隠れた者は、宇宙ではラーとして現れ、神殿ではプタハとして現れ、そして彼(ら)はすべての神々を包含していると言っているのです。つまり、一なる者を求めていくのだけれども、多なる者も認める、そういった形でエジプトの宗教は進んでいくわけです。

さらに末期時代になりますと、こういったベス神という神が表現されます。これはちょっと変てこな神です。グロテスクな神なのですけれども、「七つの頭を持つベス神」という言い方をしますが、

実はこういう姿が大事なのではなくて、まさに超越した神を表現するために、いろんな姿を合わせているわけです。一なる超越した神を表現する方法として、こういった表現がなされてくるようになってきます。

時間が迫ってきていますので、そろそろ終わりのほうへ入りたいと思います。

末期時代、新王国から個人的な信仰心というのが出てきた時代から最後のほうになってきますと、エジプト的な一神教のようなものが出てきます。それをいくつか紹介したいと思います。

『アメン・エム・オペトの教え』、これはかなり有名なものです。われわれが最初に見てきたような、いろんな姿をしている神、儀式をしている神、そういったものとは違う神がここに出てきております。

明日を恐れて過ごすな

夜明けには明日はいかなるものに似るか

明日がいかなるものかは人々はわからず

神は常に成功したまえり

人は常に失敗する

——わからないでもありません——

人々の語る言葉と神のなしたまうことは別である

我、悪しきことなしと言ってはならぬ

争いを求めてはならぬ

悪しきことも神に属するものにして

神の指もて封印される

このへんはどういうふうに解釈していいのかわかりませんが、人間は無力である。人間にとっていいこと、悪いことという判断は人間がしている判断であって、神の目から見たら、人間の理性というのは無力なのであって、神の目から見たら、悪いことでさえ、それも善なのだという発想なのかもしれません。もし、そういう発想であるとするならば、これはたいへん高度な発想のような気がいたします。おわかりいただけるでしょうか。人間の目から見

て悪いこと、いいことという判断はするなど。人間は被造物、つくられたものであって、神の目から見たらすべて善なのだと、そういう発想であるのかもしれませんが。

神の御手に成功はなし
されど神の前に失敗もなし
人、成功を求めて神に向くが
瞬時に成功も失われる

これも同じです。神の御手に成功はなしということはありません。神は成功するものなのです。しかし、先ほども言いましたように、もし人間の理性が無力であって、人間の目から見て善であるとか悪とかというようなことを考えれば、世の中には悪事がいっぱいあるわけですね。不正があり、殺人が起こり、戦争がある。ということは、神の手に成功はないのです。しかし、そういう事柄は、人間の理性から見たら悪であろうが、神から見れば善なのだという発想なのかもしれません。もしそうであるとするならば、これはたいへん高度な神学であろうと思います。ただ、このあたりについて、私はもっと勉強をしていきたいと思っています。

それから、最後の資料でございますが、『インシナー・パピルス』というのがあります。紀元後1世紀ごろのものです。エジプトにはなかなか体系的な神学というのがないのですけれども、おもしろいタイトルがついています。「神の偉大さを知り、それをあなたの心に置くための道」と書いてあります。

なぜ太陽と月は天を行くのか
水、火、風はどこから来て、どこへ行くのか、
護符や呪文は誰のおかげで薬となるのか
神の隠されたわざ
彼はそれを日々、地上でそれを知らしめる

目の前にいろんな神の彫像があるかもしれないけれども、そういうものが神ではありません。水とか風とか、その背後に隠れた神がいて、その神がそれらを操作している。護符とか呪文も、その背後に隠れた神がいて操作している。隠された技があるのだ、ということですね。

神は光を闇とともに発生させ
そのなかにすべての被造物がある
——やはり、万物をつくったのは一なる神なの
ですね——
彼は大地を発生させ
幾百万のものを生み出し、飲み込み
そして生み出す

一なる神としてすべてのものを生み出しているということになります。

このパピルスが書かれたのは紀元後1世紀です。そういう意味では、面白い時代だと思います。キリスト教との関係であるとか、たいへん似ているところも多いことで、今後、私自身は少し勉強してみたいと思っています。

いままで見てきましたが、エジプトのあいまいな神という観念は、社会の危機のなかで比較的容易に一神教の道具になりえるのではないかと思っています。

今日はエジプトの神々の柔軟な性格、形態、姿へのこだわりのなさを見てきました。この考えは、エジプトの歴史の初めから最後まで維持されたように思います。しかし、社会に危機が起こると、多神教と矛盾しないかたちで、万物の根源として一なる者を考えるようになりました。ひょっとしたら、みなさまが思い浮かべておられたエジプトの神々と違ったかもしれませんが、また、私自身が勉強不足からおかしなことを言っているのかもしれませんが、エジプトの宗教の一つの見方としてお示したつもりです。

ご清聴ありがとうございました。

シンポジウム ワークショップ°